CHISAN-KANGAKU-KAI

海住山寺蔵『〔相生の松〕』(絵巻)について

高橋秀城

はじめに

ここに紹介するのは、真言宗智山派海住山寺(京都府木津川市加茂町)に蔵される絵巻『〔相生の松〕』(一軸。以下、「海住山寺本」と略称)である。この絵巻には外題も奥書もないが、箱書きに「住吉之絵巻物　一巻」(蓋表)とあることによって、これまで鎌倉時代前期に成立したとされる擬古物語『住吉物語』を絵画化した『住吉物語絵巻』ではないかと考えられていた。しかしこの度、幸いにも閲覧する機会を得て内容を確認したところ、お伽草子『相生の松』(絵巻)の一伝本であることが確認された。

海住山寺本は、保存状態が極めて良好であり、六図ある絵画部分の色彩も鮮やかに残っている。詞書部分には金泥による草木の下絵が施され、紙背には金箔が散らされるなど、豪華な作りとなっている。既に別稿において詞書部分の翻刻紹介を行ったが(1)、本稿では書誌事項を示すとともに、『相生の松』の伝本の整理を行い、海住山寺本の位置付けを行いたい。

お伽草子『相生の松』の伝本は極めて少ないことから、海住山寺本は貴重であり、広く学界に紹介する意義は大きいと考えている。

NII-Electronic Library Service

CHISAN-KANGAKU-KAI

一　海住山寺蔵『〔相生の松〕』書誌

海住山寺本の書誌事項は次の通りである。

海住山寺蔵『〔相生の松〕』。絵巻、一軸。紺地金糸文様布表紙に、金茶色の見返(三二・五糎×二一・五糎)、淡黄色の鳥の子紙を料紙に用いた美しい装訂の巻子本(軸は紫檀軸頭軸)である。詞書部分には金泥にて下絵(草木)を描く。毎葉二十二行程度、毎行十八字内外。本文は漢字平仮名交じり文。江戸時代中期の製作と思われる。表紙の左肩に金地の貼題箋が貼られているが書名の記載はない。内題、奥書なし。紙背は白地に金箔が散らしてある。絵巻を収める木箱の蓋表に「住吉之絵巻物　一巻」、蓋裏に「住吉の絵巻物／隆範蔵〔印記〕／海住山寺蔵付了」と墨書がある(印記は朱方印陽刻「隆範」(一・一糎×一・一糎))。全二十二紙(詞書十六紙、絵画部分六紙)が継がれており、各紙の寸法(二紙目以下紙幅のみ)は、一紙(三二・五糎×四六・八糎)、二紙(四九・三)、三紙(絵Ⅰ、四九・五)、四紙(四九・一)、五紙(四九・〇)、六紙(二四・三)、七紙(絵Ⅱ、四九・三)、八紙(四九・〇)、九紙(四九・三)、十紙(四八・五)、十一紙(絵Ⅲ、四九・八)、十二紙(四九・〇)、十三紙(一七・八)、十四紙(絵Ⅳ、四八・八)、十五紙(四九・〇)、十六紙(三〇・三)、十七紙(絵Ⅴ、四九・七)、十八紙(四八・一)、十九紙(四八・七)、二十紙(絵Ⅵ、九三・一)、二十一紙(四九・〇)、二十二紙(二六・二)である。所々、裏打補修が施されている。

外題・内題は無く、また奥書も存しないため、正式な書名および書写者等は不明と言わざるを得ない。絵巻を収める箱の蓋表に「住吉之絵巻物　一巻」、蓋裏に「住吉の絵巻物」「隆範蔵」と墨書されていることから、内容が「住吉」を舞台とした「絵巻物」であること、この絵巻が海住山寺住職佐伯隆範和上(範真・一八四九～一九〇五)の所蔵品であったことが知られる。なお、この度の調査により、内容がお伽草子『相生の松』であることが判明したことから、本稿では箱書きにある「住吉の絵巻物」ではなく、『〔相生の松〕』と呼称することとした。

料紙は全二十二紙が継がれており、横の寸法はほぼ四十九糎前後となっている。ただし、ところどころ短いものも見受けられ(六・十三・十六・二十二紙)、絵画六図のうちの一枚(二十紙)のみ、ほぼ料紙二枚分の大図となっている。

NII-Electronic Library Service

CHISAN-KANGAKU-KAI

また途中に、何箇所かの裏打ち補修が施されている。例えば九紙と十紙の継ぎ目には金箔紙によって補われた形跡が残るが、十紙一行目「こやおのへ」の「や」の文字の一部が紙継ぎ箇所に隠れている。これは補修の際に一旦継ぎ目を剝がし、補修の後に再び継がれたものではないかと推測される。

本絵巻物がなぜ海住山寺に将されたのかについては判然としない。ただし箱書きに記す通り、佐伯隆範の収集によるものであることは確かだろう。現在、海住山寺では蔵書の悉皆調査が行われており、佐伯隆範の書写による聖教が数多く遺されていることが解明されつつある。こうした聖教類に混ざって、今回紹介するような絵巻が存在することは、隆範の幅広い興味と関心、ひいては師の人柄をも物語るものとして大いに注目される(2)。

二　『相生の松』伝本

お伽草子『相生の松』は、別名「松ヶ枝姫物語」とも称し、松のめでたさを物語る祝儀物・仙境譚・縁起物に分類されている(3)。世阿弥(一三六三～一四四三)作の謡曲『高砂』を題材とした物語であり、長寿と夫婦の情愛を祝福する目出度い内容となっている。古くは「相生」「相生松」と呼ばれており、その梗概は以下のようなものである(行論上、A～Gの七段に分けた)。

この世で特に素晴らしいのは、霜にも色を変えることのない松である。昔、播磨の国高砂の浦に松ヶ枝姫という姫君がいて(A)、摂津の国住吉の里に松高彦という神がいた(B)。ある時、松高彦は、風の響きに琴の調べが聞こえてくるのを不思議に思い、舟に乗って播磨の国に辿り着き、松ヶ枝姫に一夜の仮の宿を求めた(C)。松ヶ枝姫は、ここが仙境であることを告げ(D)、仙境に迷い込んだ男が美しい女房と夫婦になったという唐土の故事を語りながら(E)、ここに留まり夫婦になってほしいと懇願する。松高彦は、男松と女松の二本の松を植えて住吉に帰り、その後も変わらずに松ヶ枝姫のもとに通い続けた。やがて夫婦の神は年齢を重ねて白髪となったが、松の下で音楽を奏でると(F)、忽ちに若返ったという。ついに夫婦の神は飛仙となって天に昇り、二人の契りはそのまま松に残された。国はいよいよ栄え、民

NII-Electronic Library Service

CHISAN-KANGAKU-KAI

は言祝ぐべき例証として「相生の松」と名づけたということである(G)。

現在、『相生の松』の伝本としては、次の六本が知られている。

① 天理大学附属天理図書館蔵『松ヶ枝姫物語(仮題)』(一軸、寛文～元禄期の製作)。＊以下、天理本と略称。

② 藤井隆蔵『松たか彦物語』(『虫物語』他と合冊)。＊以下、藤井本と略称。

③ 赤木文庫蔵『相生の松』(一軸、寛文～元禄期の製作)。＊以下、赤木文庫本と略称。

④ 海の見える杜美術館蔵(旧・王舎城美術宝物館)『相生の松』(一軸、寛文・延宝頃写)。＊以下、海の見える杜本と略称。

⑤ 板坂則子蔵『相生の松』(一軸、近世前期写か)。＊以下、板坂本と略称。

⑥ 海住山寺蔵『(相生の松)』(一軸、近世中期写か)。＊海住山寺本。

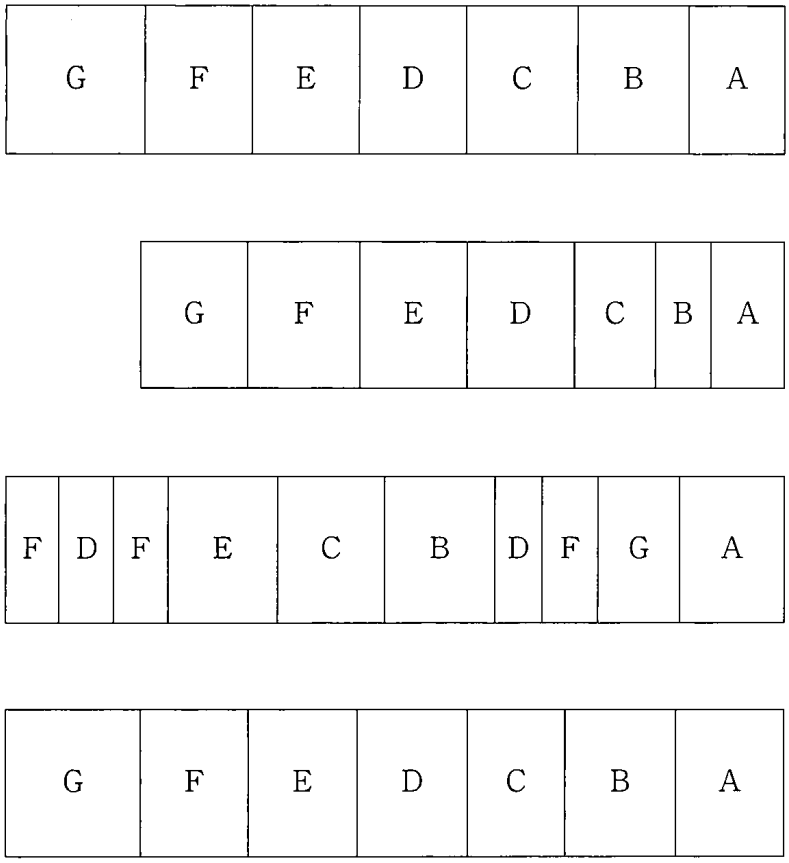
これらの伝本を概観すると、①天理本には外題・内題が無く、『松ヶ枝姫物語』という仮題が付されており、二箇所にわたる脱文が見られる(4)。②藤井本は、『虫物語』他と合綴されたもので、一部のみの本文を有する零本。③赤木文庫本は①天理本とほぼ同様の本文を持ち、内題は無いが、表紙に「あひ生の松」との墨書題箋を有している。巻末には「はせを写」、第六図の左隅上には「紀之／美光院／画写」と記され、製作者と思しき人物を窺い知ることができる(5)。④海の見える杜本は、外題題箋に「相生の松」とあり、図録などによって絵画全六図のうちの五図までを確認することができる(6)。③赤木文庫本の発見によって『相生の松』という書名や話の全体像が判明し、また④海の見える杜本によって絵画部分の一部が明らかとなった。なお、④海の見える杜本については、詞書全文の紹介はなされていないものの、①天理本と「ほとんど同じくする本文を有する(7)」と解説されている。⑤板坂本は近年紹介されたもので、内題は無く、題箋に「相生の松」とある。内容については、「本文部分に錯簡が見られるものの保存状態も良好で、比較的古態を保っている奈良絵巻である(8)」と説かれており、錯簡を改めた形での全文の翻刻と、①天理本・③赤木文庫本との校異、全体の画像が掲載されている。⑤板坂本の紹介により、④海の見える杜本には見られなかった新たな二つの絵画部分も明らかとなり、『相生の松』の全体像を知ることができた。

NII-Electronic Library Service

CHISAN-KANGAKU-KAI

これら『相生の松』伝本について、板坂則子氏は、①天理本・③赤木文庫本・⑤板坂本の三本の比較検討から、それぞれの錯簡状況を解説している。そこで、板坂氏の論に導かれる形で、氏の論文中に示された図に⑥海住山寺本を加え、次に挙げる(【図一】。A～Gの記号は、話の粗筋と対応する)。

【図一】



A…松ヶ枝姫の由来
（絵Ⅰ）の前まで。
B…松高彦の由来
（絵Ⅱ）の前まで。
C…松ヶ枝姫を訪ねる
（絵Ⅲ）の前まで。
D…二人の会話
（絵Ⅳ）の前まで。
E…唐土の仙境譚
（絵Ⅴ）の前まで。
F…音楽の演奏
（絵Ⅵ）の前まで。
G…相生の松の名称

NII-Electronic Library Service

CHISAN-KANGAKU-KAI

先に触れたように、①天理本には前半のB・Cに脱文があり、また④海の見える杜本は未だ調査の機会を得ないが、おそらく①天理本と同様の体裁ではないかと推測される。また⑤板坂本は、本文は整っているものの、料紙の綴じ違いによって話の順序に乱れが生じており、組み替えて読まなければならない状況となっている。

こうした伝本状況の中にあって、⑥海住山寺本は善本とされる③赤木文庫本と同様に大きな錯簡もなく、料紙も順番に継がれていることが分かる。

三　本文(詞書)の比較

次に、現在『相生の松』の全文が翻刻されている①天理本・③赤木文庫本・⑤板坂本と⑥海住山寺本との比較から、いくつか特徴的な箇所を指摘してみたい。

i　赤木文庫本の脱文

(赤木文庫本)「女のわらは、うちに入、このとしころ、きゝつたへ、心にかゝる事侍り」
(天理本)ナシ
(板坂本)「女のわらはうちにいりてこのよし松かえ姫に申けるあるしきゝ給ひてすみよしときくからに此としころきゝつたへて心にかつ事侍へり」
(海住山寺本)「女のわらはうちにいりてこのよしまつかえひめに申けりあるしきゝ給ひてすみよしときくからにこのとしころきゝつたへてこゝろにかゝること侍り」(10紙11行～)

赤木文庫本では、海住山寺本で波線を付した箇所が抜け落ちている。また天理本は、この箇所自体が見られない。板坂本は海住山寺本とほぼ同様の本文だが、板坂本のほうが漢字を当てる傾向にある。本文も若干の相異が見られ、この箇所のみの比較で言えば、海住山寺本の本文がやや整っているように見受けられる。

ii　海住山寺本の脱文

NII-Electronic Library Service

CHISAN-KANGAKU-KAI

(赤木文庫本)「しかるを、住のえの、うらはのをちより、ふきをくる風にきこゆる、琴の音に、あくかれ出て、こく舟の、さほにまかせて、この所まてきたり侍りしに」

(天理本)「しかるを、すみのえの、うらわのをちより、吹おくる、風に聞ゆる、こととのねに、あくかれ出て、こく舟の、さほにまかせて、このところまて、きたり侍へりしに」

(板坂本)「しかるをすみのえのうちわのおちより吹をくる風に聞ゆることのねにあくかれ出てこくふねのさほにまかせてこのところまてきたり侍りしに」

(海住山寺本)「しかるを住のえのうらはのをちよりふきをくる舟のさほにまかせてこのところまてきたりしに」(12紙8行～)

赤木文庫本の波線を付した箇所が海住山寺本には見られない。この箇所は、天理本・板坂本にも存在することから海住山寺本の脱文と思われる。他の伝本によって本文を補うことができる箇所である。

iii　海住山寺本の独自本文

(赤木文庫本)「この御神の御こゝろを、しつかに、あんしたてまつるに」

(天理本)「此御神の御心を、しつかに案し奉るに」

(板坂本)「此御神の御こゝろをしつかにあんしたてまつるに」

(海住山寺本)「この御神の御こゝろをしつかにかんしたてまつるに」(6紙3行)

海住山寺本では和歌の後の一文として「かんしたてまつるに」と見える。他の伝本では「かんし」(「感じ」)ではなく「あんし」(「案じ」)となっており相異が見られる。意味上は問題ないが、「あ」(安)と「か」(加)の字形の崩しの相似によるものとも言えようか。

(赤木文庫本)「ふきいつる」、(天理本)「吹いつる」、(板坂本)「吹きいつる」

(海住山寺本)「雲の中より吹おろすあらしは」(21紙3行)

NII-Electronic Library Service

CHISAN-KANGAKU-KAI

また同様に、海住山寺本の波線箇所「吹きおろす」が、他の伝本では「ふきいつる」となっており相異が見られる。これが意図的に改変されたのか定かでないが、この箇所もまた「おろす」の「お」(於)と「いつる」の「い」(「出」)、「おろす」の「ろ」(呂)と「いつる」の「つ」(川)の字形の崩しの類似による誤写の可能性も考えられる。

数箇所の本文を比較したに過ぎないが、⑥海住山寺本は③赤木文庫本と同様に大きな錯簡は見られないものの、若干の脱文や細かな本文の相異が見られる。今回新たに見出した海住山寺本を加えた各伝本の本文を今後さらに比較し、相互に補完し合うことによって、より整った本文が復原できる可能性がある。

四　『相生の松』の引用歌

『相生の松』には和歌が引用されているが、従来の研究ではあまり問題にされてこなかった。そこで以下、引用歌の出典を指摘するとともに、若干の考察を加えてみたい(本文引用は海住山寺本に拠ったが、読みやすさを旨として表記を改めた箇所がある)。

さればにや、津もりのくになつ、この浦の眺望を詠みける歌にも、

あさゆふにみればこそあれ住よしのうらよりをちのあはぢしは山

と詠しけるも(5紙21行～6紙2行)

という「あさゆふに」の歌は、海住山寺本では絵Ⅱの前に見えるが、これは『新後拾遺和歌集』(永徳三年〔一三八三〕成立)に、

永仁六年十月、亀山院住吉社御幸時、遠島眺望といふことをつかうまつりける　津守国冬

朝夕に見れはこそあれ住吉の浦よりをちの淡路島山⑨(『新後拾遺和歌集』第十六・雑歌上・一二七八番歌)

として採録される。歌集の詞書きによれば、永仁六年(一二九八)に亀山院(一二四九～一三〇五)が住吉社に御幸した際、「遠島眺望」という題で津守国冬(一二六九～一三二〇)が詠じたものという。またこの歌は、住吉大社に縁の深い社家津守

NII-Electronic Library Service

CHISAN-KANGAKU-KAI

家の歌を集めた『津守和歌集』(成立年未詳)にも採録されており、やはり津守国冬が詠じたものとされている。しかし、『相生の松』の各伝本では、詠者が津守国冬ではなく、傍線を付したように国冬の子である津守国夏(一二八八～一三五二)の歌としている。国冬の父国助(一二四二～一二九九)・国冬・国夏は和歌に長じ、勅撰集にも入集している歌人である。とりわけ国夏は、正平七年／文和元年(一三五二)に後村上天皇(一三二八～一三六八)が国夏の住江殿を行宮として滞在したことによって正三位に昇り、その後も同天皇は崩御するまで住吉殿を行宮と定めるなど天皇家との結びつきが深い(10)。『相生の松』で、「国冬」ではなく「国夏」とあるのは、名の通った方に逸話が吸収されてしまったものか、はたまた、より著名な「国夏」にあえて改変し、読者の興味を引こうとしたのだろうか(11)。

されば明神の御歌に、

夜さむきころもやうすきかたそぎの行あひのまに霜やをくらん
とふゆの夜をわび給ひてよみ給ふ(21紙10行～13行)

という住吉明神の和歌は、若干の言葉の相違はあるが、

夜やさむみ衣やうすきかたそきの行合のまより霜や置らん
住吉の御歌となむ　(『新古今和歌集』第十九・神祇歌・一八五五番歌)

と諸書に見える住吉の神の詠歌を典拠としたものであろう。『古今和歌六帖』(4489)や、『俊頼髄脳』(63)、『綺語抄』(598)、『袖中抄』(873)、『童蒙抄』(77)、『奥儀抄』(409)などの歌学書に類歌が散見し、特に『袋草紙』上巻「希代の歌」では、「これは、社破壊の由帝王に奏せよとて夢に見する歌なり(12)」として、住吉社が荒廃していることを帝に告げるために、住吉明神が夢の中に立ち顕れて詠じたものとされる。住吉明神の託宣歌として、広く歌人たちに語り継がれていた歌と言えよう。

また、『相生の松』の末尾には、

古今の序にしるしつゝたかさこすみのえの松もあひおひのやうに(22紙1行～)

NII-Electronic Library Service

CHISAN-KANGAKU-KAI

と見える。これは先学も指摘するように、『古今和歌集』仮名序の、

細石に喩へ、筑波山に掛けて君を願ひ、喜び身に過ぎ、楽しび心に余り、富士の煙に寄そへて人を恋ひ、松虫の音に友を偲び、高砂、住の江の松も、相生の様に覚え、男山の昔を思ひ出でて、女郎花の一時をくねるにも、歌を言ひてぞ慰めける。[13]

を踏まえたものであり、謡曲『高砂』にも「高砂住吉の松に相生の名あり、当所と住吉とは国を隔てたるに、なにとて相生の松とは申し候ふぞ」[14]と見える。海住山寺本の箱書きに「住吉之絵巻物」と記すが、これは「住吉の松の絵巻物」であり、「高砂の松」「相生の松」と同義の意味合いで付されたものと推測される。

五　絵画部分の比較

海住山寺本『〔相生の松〕』には六図の絵画がある。高砂の松ヶ枝姫の様子(絵Ⅰ)、住吉の松高彦の様子(絵Ⅱ)、高砂での松ヶ枝姫と松高彦の対面(絵Ⅲ)、松ヶ枝姫が住む仙境での二人の様子(絵Ⅳ)、邸内の松ヶ枝姫と門に立つ松高彦の様子(絵Ⅴ)、楽を奏する場面と海上に集まる仙人達(絵Ⅵ)である(末尾に海住山寺本の全六図を掲載した。【図二】「海住山寺本の絵画部分」絵Ⅰ～Ⅵ)。『相生の松』の絵については、④海の見える杜本に五図までを確認することができ、⑤板坂本では全六図が紹介されている。また、①天理本・③赤木文庫本は本文のみで絵の紹介はない。

海住山寺本の絵の特徴としては、登場人物の顔の表情や服装などの描法が、全て異国風(唐風)となっていることが挙げられる。これは、舞台である住吉と高砂が、俗界を離れた仙境であったとの場面設定によるものであろう。中には、暖地で自生するソテツのような草木も描かれるなど(絵Ⅳ)、異国を意識した描画が随所に見られる。

④海の見える杜本・⑤板坂本も、やはり唐風の雰囲気を漂わせているが、それぞれを比較してみると微妙に構図が異なっており、絵師による作風の違いを見ることができる。特に海住山寺本は、全体的に④海の見える杜本よりも⑤板坂本に近い描法のように見受けられ、海住山寺本と⑤板坂本の両絵師が参考とした親本の存在が想起される。ただし、例

NII-Electronic Library Service

CHISAN-KANGAKU-KAI

えば最終図(絵Ⅵ)の「舞楽の場面」についてみると、舞人の人数や服装が海住山寺本では他の伝本と異なっている(【図三】「舞楽の場面」比較)。今後、舞人の服装や編成などを検討することで、舞楽の曲名も明らかになるかもしれない。

先に述べたように、①天理本・③赤木文庫本の絵画部分は紹介されていない。今後の調査によって明らかとなれば、海住山寺本の絵画部分の特徴もさらに明確になるものと期待される。

なお、『相生の松』以外のお伽草子(絵巻)に対象を広げると、『相生の松』と似た描法の絵巻をいくつも見出すことができる。例えば、海住山寺本の絵画部分(絵Ⅰ・Ⅱ)に見られる構図は、二松学舎大学附属図書館蔵『咸陽宮絵巻』(奈良絵本)[15]や、工藤早弓氏が『奈良絵本・上』の中で紹介する『熊野の本地』(江戸時代前期・絵巻二巻)[16]の邸宅の様子、立教大学図書館蔵『長恨歌絵巻』[17]の院内の様子と類似している。構図だけでなく、床の模様や色使いといった細かい箇所も酷似しているのである。これらの絵巻は『相生の松』同様、異国・異境を舞台としていることから、こうした場面を描く際に参考とする雛形や粉本の存在を示唆するものとして興味深い。今後、構図や描法の比較をさらに進めることによって、お伽草子の絵師の流派が浮かび上がって来る可能性もあるだろう。

おわりに

本稿では、海住山寺蔵『〔相生の松〕』(絵巻)をめぐって、書誌事項や伝本の状況、詞書や絵画部分の比較を行うことにより、海住山寺本の位置付けを行った。お伽草子『相生の松』の伝本は、六種が知られるのみで極めて少ない。その中にあって海住山寺本は、善本と目される赤木文庫本と同様に錯簡もなく、整った本文を有している。保存状態も良く、鮮やかな絵も残されている。今後『相生の松』の伝本比較をさらに詳細に行うことにより、より良い本文の姿や共通祖本の存在、成立や享受の様相など、さまざまな事柄が明確になってくるものと期待される。その点においても海住山寺から『〔相生の松〕』が見出されたことの意義は大きく、今後のお伽草子研究に寄与するところ大であろう。

なお、海住山寺本は江戸時代中期の製作と推測されるが、この時期における住吉と絵画との関わりで言えば、寛文三

NII-Electronic Library Service

CHISAN-KANGAKU-KAI

年(一六六三)に神主津守国治が法橋如慶(一五九九～一六七〇)に対し、大和絵の一派住吉派復興に関する「住吉大神社絵所証文」[18]を出していることが注目される。住吉を舞台とする『相生の松』が製作される背景として、こうした住吉大社の動向も関係するだろうか。また『〔相生の松〕』が海住山寺に伝来した経緯については詳らかでないが、海住山寺には隆範所蔵の書や絵画が残されていることからすれば、隆範自らが購入したとも考えられよう。[19]

その他、海住山寺と絵巻との関わりからすれば、海住山寺に狩野永納(一六三一～一六九七)筆『海住山寺縁起』(二巻)が蔵されることに注意を払わなくてはならない。寛文二年(一六六二)の解脱上人貞慶(一一五五～一二一三)の四百五十年御遠忌との関わりから製作されたであろうことが指摘されており、海住山寺蔵『〔相生の松〕』も含めながら、寺院における絵画の役割についても考えていく必要があるだろう。[20]

註

(1) 拙稿「海住山寺蔵『〔相生の松〕』解説ならびに翻刻」(「大正大学研究紀要」第九十八輯、平成二十五年三月)。

(2) 佐伯隆範師の足跡については、佐脇貞憲『佐伯隆範大僧正百回忌奉修記念　黙堂範真大和上雑纂』(海住山寺、平成十六年六月三日)に詳細に紹介されている。

(3) 徳田和夫編『お伽草子事典』(東京堂出版、平成十四年九月)「相生の松」の項。

(4) 横山重・松本隆信編『室町時代物語大成』第十二(角川書店、昭和五十九年二月)所収。

(5) 横山重・松本隆信編『室町時代物語大成』補遺一(角川書店、昭和六十二年三月)所収。

(6) 『思文閣古書資料目録』第百五十五号、善本特集第九輯(思文閣出版、平成九年六月)一六八頁、『物語絵―奈良絵本と絵巻に見る古人のこころ―』(海の見える杜美術館、平成十八年七月)七十頁、『海の見える杜美術館至宝展　The STORY～偉才のコレクター梅本禮暉譽の軌跡』(海の見える杜美術館、平成二十一年八月)九十三頁に、本文と絵画部分の一部が紹介されている。

(7) 前掲注(6)書『思文閣古書資料目録』一六八頁。

NII-Electronic Library Service

CHISAN-KANGAKU-KAI

（8）板坂則子・井黒佳穂子・安岡充令「新出　奈良絵巻『相生の松』」(「専修国文」第八十四号、平成二十一年一月所収)。

（9）引用は、『新編国歌大観』所収のものに拠る。なお、和歌の引用は特に断らない限り『新編国歌大観』に拠る。

（10）『園太暦』(巻四)「文和元年二月二十八日条」に「廿八日、壬寅、天晴、後聞、天皇今日著御住吉、以神主国夏館為御在所、但可御住吉殿、仍有修造云々」と見える(『園太暦』続群書類従完成会、昭和四十六年五月)。国夏は笛の名手でもあり、また元徳二年(一三三〇)には、延暦寺大講堂供養において太鼓を勤めている(『体源抄』)。なお、住吉大社における雅楽と津守家との関わりについては、南谷美保「住吉大社と雅楽―その演奏環境に関する歴史的考察―」(「四天王寺国際仏教大学紀要」第四十四号、平成十九年三月)参照。

（11）「朝夕に」の歌は、住吉大社の「踏歌神事」熊野舞(四段)の中で「や　あさゆふにや　あさゆふにや　みればこそあれすみよしのや　うらよりをちの　をちの　あはじしまやま」と歌われているようである(「喜多文庫民俗芸能データベース」http://www.suma.kobe-wu.ac.jp/kita/index.html)参照。なお、『仮名手本忠臣蔵』にも「朝夕に見ればこそあれ住吉の。岸の向ひの淡路嶋山といふ事知らぬか」(「日本古典文学大系本」)として類歌を見ることができる。

（12）引用は、新日本古典文学大系　藤岡忠美校注『袋草紙』(岩波書店、平成七年十月三十日)所収のものに拠る。『袋草紙』では、この「夜やさむき」の歌の後に、住吉明神にまつわる三首を載せる。特に奈良帝が詠んだとされる「われみてもひさしく成りぬすみよしの」について、元は慈覚大師円仁(七九四～八六四)の歌であるとの故事を示している点は興味深い。

（13）引用は、新日本古典文学大系　小島憲之　新井栄蔵校注『古今和歌集』(岩波書店、平成元年二月二十日)所収のものに拠る。

（14）引用は、日本古典文学大系　横道萬里雄　表章校注『謡曲集上』(岩波書店、昭和三十五年十二月五日)所収のものに拠る。

（15）二松学舎大学附属図書館蔵『咸陽宮絵巻』(奈良絵本)は「寛文頃(一六六〇年代)写。伝本は少なく、現在まで判明しているのは六点」とされる(二松学舎大学附属図書館「季報」第七十四号、平成二十一年十月十日)。

（16）紫紅社(文庫)、平成十八年十月三十一日。一二二頁等参照。なお、同書所収の『咸陽宮』(江戸時代前期・絵巻二巻)にも類似した構図が見られる。

（17）立教大学図書館蔵『長恨歌絵巻』については、「作者未詳　年代未詳　一巻　※狩野松栄筆との鑑定書付」で「従来全くその存在を知られていなかったオリジナルな資料であり、文芸と絵画の分野のみならず、白楽天の長恨歌受容の展開をうか

NII-Electronic Library Service

CHISAN-KANGAKU-KAI

がえる、日本と中国の比較文化研究など多方面の可能性を持つ資料」(小峯和明氏解説)とされる(「立教大学図書館所蔵資料デジタルライブラリ展示作品「長恨歌絵巻」http://www.rikkyo.ac.jp/research/library/_asset/pdf/archives/exhibition/chougonka.pdf」)。

(18) 「住吉大神社絵所証文」は、東京芸術大学付属図書館蔵「住吉家伝来記録類」の中に収められている。

(19) 前掲注(2)書には、隆範の所蔵品として、隆範の為に描かれたと思われる富岡鉄斎(一八三七～一九二四)「山水図」や、中村敬宇(一八三二～一八九一)の書、勝海舟(一八二三～一八九九)の書が掲載されている。隆範が書画の世界にも造詣の深かったことが知られる。

(20) 海住山寺蔵『海住山寺縁起』については、『御遠忌八〇〇年記念特別展　解脱上人貞慶―鎌倉仏教の本流―』(奈良国立博物館・神奈川県立金沢文庫、平成二十四年四月六日)一四六頁参照。また、奈良女子大学「奈良地域関連資料画像データベース」には絵巻の全体画像が掲載されている(http://mahoroba.lib.nara-wu.ac.jp/y20/kaijusenji_engi/index.html)。

〈付記〉

貴重な蔵書の閲覧、掲載を御許可いただき、種々御教示を賜りました海住山寺御住職佐脇貞憲師に心より御礼を申し上げます。また画像の掲載を御許可いただきました海の見える杜美術館ならびに専修大学教授板坂則子先生に感謝申し上げます。

本稿は、智山勧学会第五十六回教学大会(平成二十四年五月十九日、於・別院真福寺)における口頭発表をもとに成稿したものです。御教示を賜りました諸先生方に深謝申し上げます。

なお本稿は、智山勧学会奨励研究助成(共同研究)の成果の一部となります。

〈追記〉

初校校正中に、原口志津子「城端別院善徳寺所蔵「相生の松」」(「富山県立大学紀要」二十、平成二十二年三月)を知った。内容を確認していないが、本稿に関連するものと思われる。先行する研究成果として挙げておきたい。

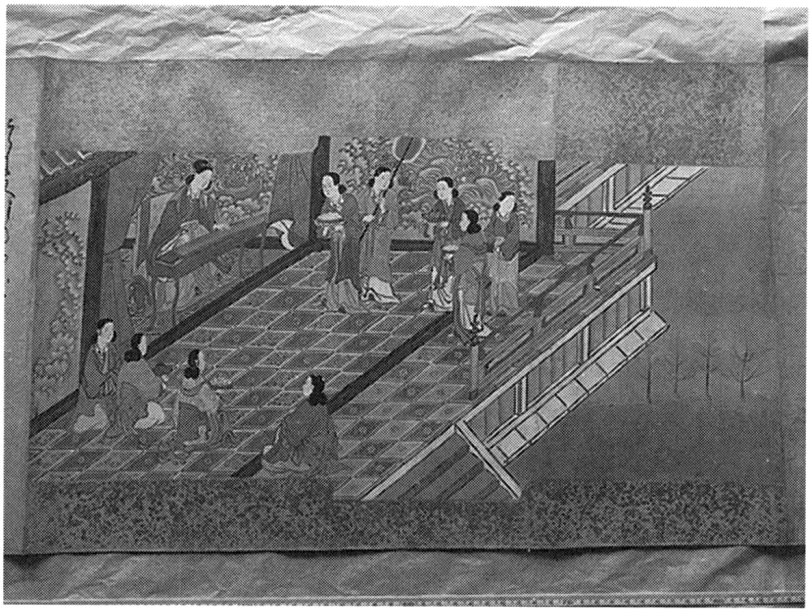
〈キーワード〉海住山寺、お伽草子、相生の松、絵巻、佐伯隆範

NII-Electronic Library Service

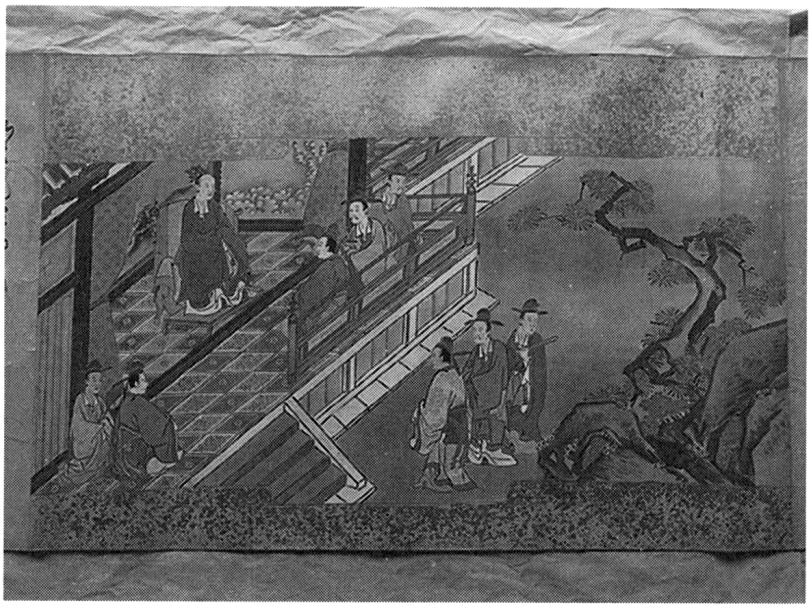
CHISAN-KANGAKU-KAI

【図二】「海住山寺本の絵画部分」絵Ⅰ～Ⅵ

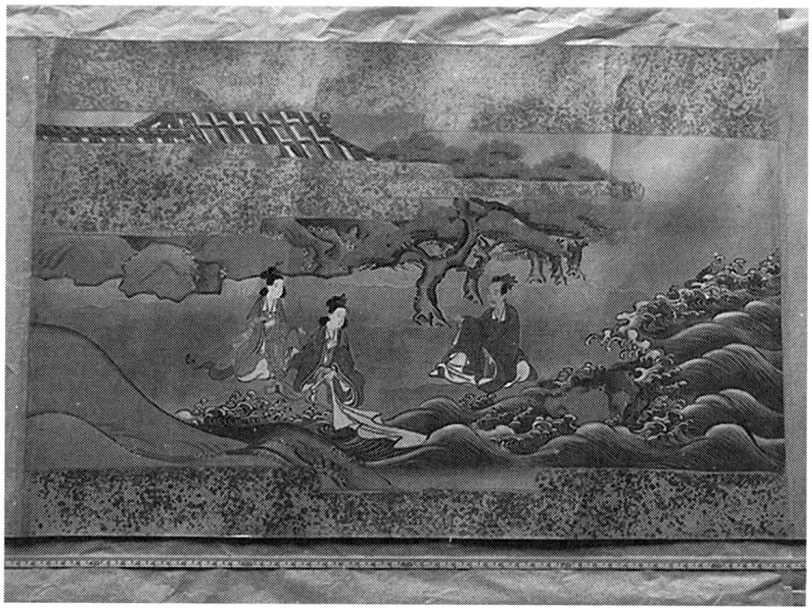
絵Ⅰ



絵Ⅱ

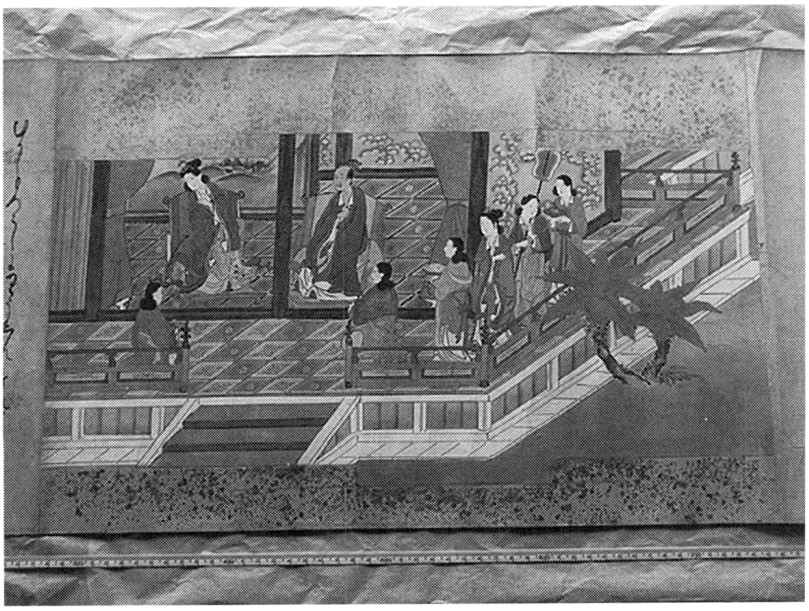


絵Ⅲ

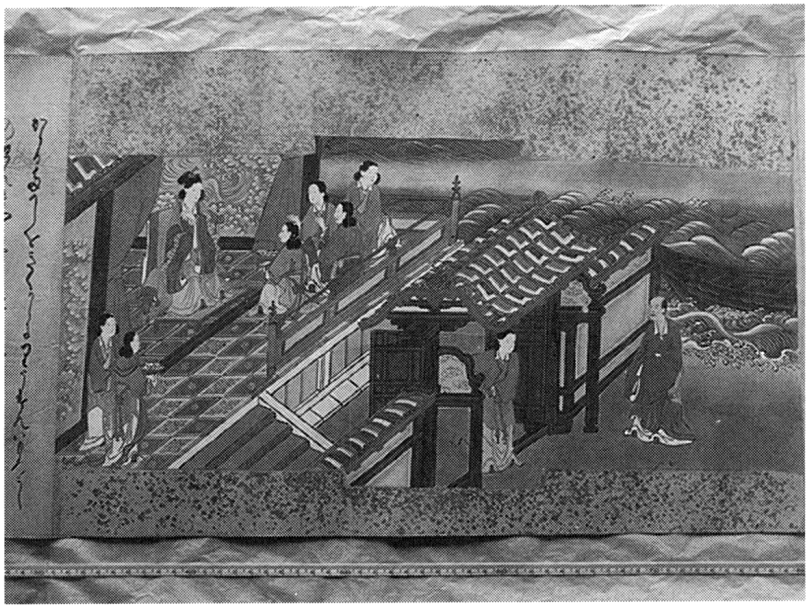


NII-Electronic Library Service

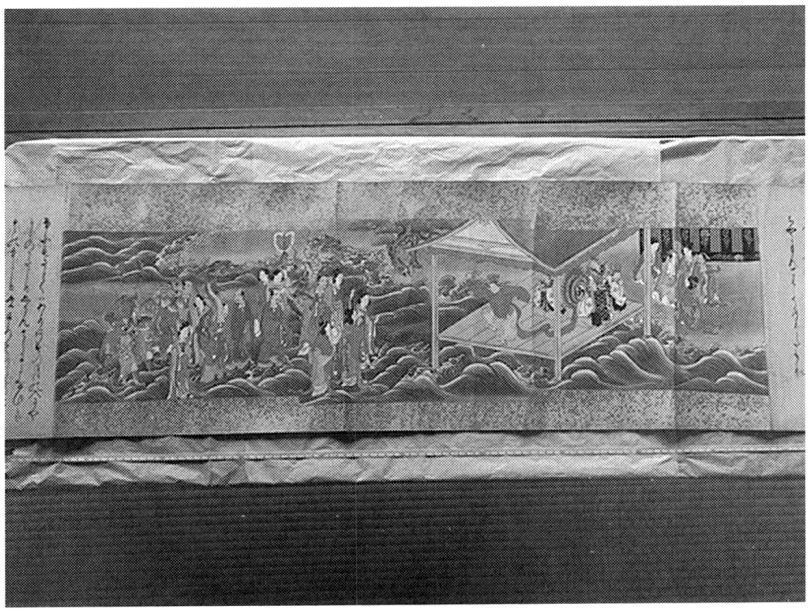
CHISAN-KANGAKU-KAI



絵Ⅳ



絵Ⅴ



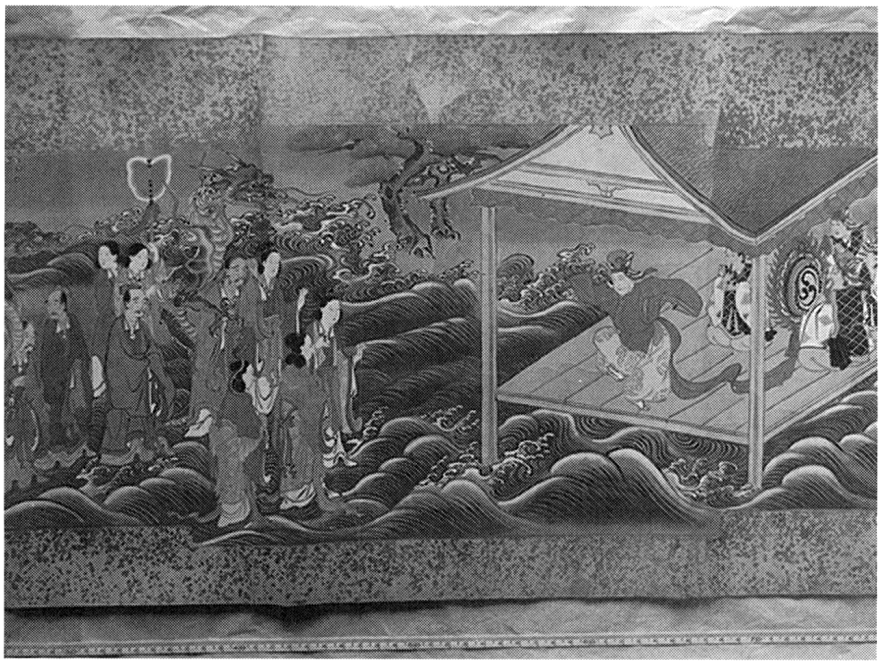
絵Ⅵ

NII-Electronic Library Service

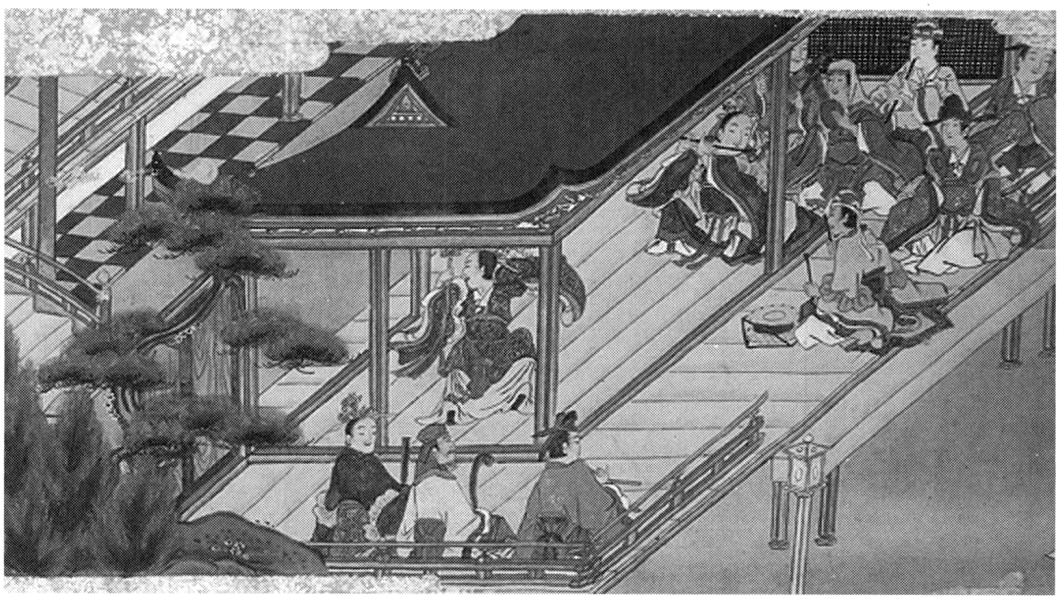
CHISAN-KANGAKU-KAI

【図三】「舞楽の場面」比較

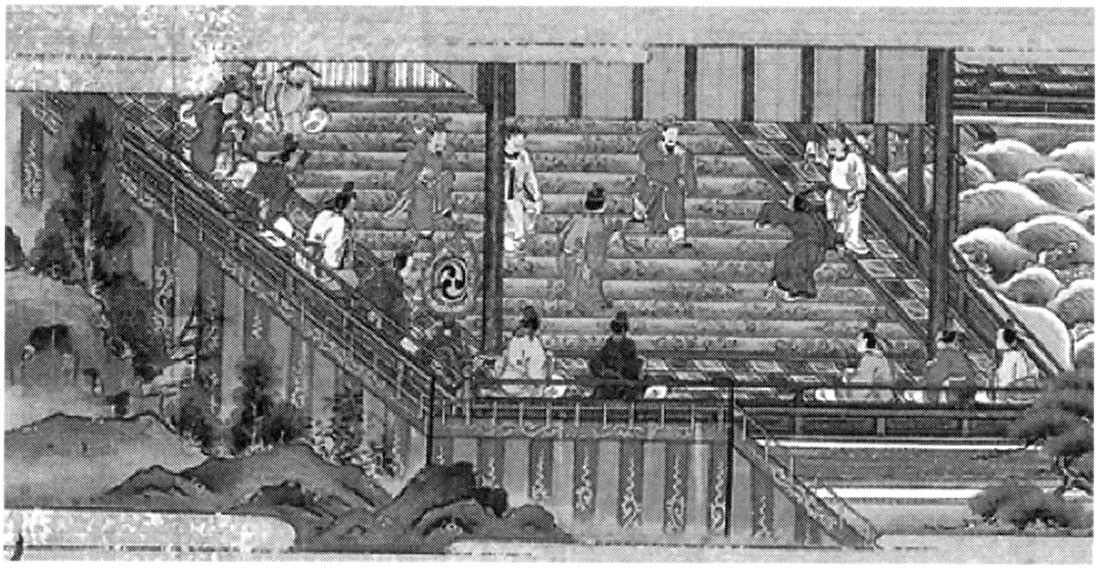
海住山寺本



板坂本



海の見える杜美術館本



NII-Electronic Library Service